



親子三代目の漁師
Vol.29 にしだて たつや
西舘 龍哉さん

がっちりした体形で温和な顔立ち。輝く瞳の奥に意気込みが宿っていました。鶴川漁協の厚真支所に所属する西舘さんは、親子三代目の漁師。祖父や父の背中を見て経験を積み、一人前の漁師を目指しています。「実は、時々船酔いするんです」と意外な一面もチラリ。帰港した浜厚真漁港で、西舘さんに話を聞きました。

“ 厚真の海を守り父に追いつく ”

上厚真小、厚南中学校から厚真高校に進み、卒業と同時に漁師になりました。父・純さんの存在が、家業を継ぐ決め手でした。「初めて船に乗って手伝ったのが、中学2年生です。沖合に仕掛けたタコ箱の回収作業でした。海底から手繰り上げるのですが、重たくて…。重労働で大変だなとは思いましたが、力仕事であれば僕にもできる。巴厘ボール大ほどのタコを引き上げた時のうれしさは、今も覚えています」。時間を見つけては船に乗ることが生活の一部になり、自然に漁師の道に進みました。

大好きなゲームを切り上げ、午後7時に就寝。午前3時にスマートフォンが目覚ましで起床します。眠い目をこすりながら身支度を済ませ、父の車で港に向かいます。自宅から10分ほどですが、眠い時には助手席です。ずっと目を閉じることもあるそうです。港に着くと、五感を研ぎ澄ませます。父の仕事ぶりを

吸収するためです。「船を操りながら、動きに無駄が無いんですよ。素直にすごいなって思いますが。まだまだ覚えることはたくさんあり、目の前の父が私の教科書です」。

海の環境を守るため、年に1度、幌内地区で行われる植樹に参加しています。「今はまだ、私には分かりませんが、豊富なミネラルが川から海に注ぐことで、漁場が良くなると聞きました」。積極的に参加し、良好な漁場づくりに汗を流します。

頼もしい父と優しい母、気心した双子の弟で、時々、パーベキューをします。笑顔に包まれた癒しの時間です。父からは「まだ、漁師半人前だけど、思った以上に働いてくれている。身の危険だけは、気を付けて欲しいな」と優しい言葉も添えられます。

大海原に誓いました。「豊かな海を守り、父に追いつく」。それが今の目標です。

厚真で暮らす人、働く人、応援してくれる人、訪れる人・・・
みんな、みんな、**ATSUMA LOVERS**